

二歳児の発達

―保育所における人とのかわり―

江波 諄子

平成十八年度より、「幼保プロジェクト」(お茶の水女子大学特別教育研究経費研究)がスタートし、その中で二歳児に焦点を当てた研究への関心が浮上してきました。同年七月三日に開催された「津守眞先生・房江先生ご夫妻と発達を考える会」での話し合いも研究への大きな誘因になりました。私自身は

保育者養成機関に長く身を置き、二歳児の保育プログラムを授業で展開していた折だったので、これを機に二歳児が日々生きていくさまをもう少し踏み込んで研究してみることになりました。

乳児保育の授業で、保育実習に行く直前の学生に「自分が出会った乳幼児一人を選んで、その子どもに

ついてわかったこと、気になったこと、疑問に思ったことをすべて語ってみよう」という課題をあらかじめ出しおきました。実習直後、B4の用紙に、

①その子どもの年齢・性別 ②家庭や日ごろの園での様子 ③身体的特徴 ④性格的特徴 ⑤どんな場面が心に残っているか出来事を紹介してください

(困ったこと・疑問・感動など)という項目について学生に記録を書いてもらいました。その結果、〇歳児Ⅱ五名、一歳児Ⅱ二十一名、二歳児Ⅱ三十三名、三歳児Ⅱ四十一名、四歳児Ⅱ二十五名、五歳児Ⅱ二十一名の記録が集まりました(記録の用途については事前に学生に説明し、了解を得ています)。

今回はその内、三十三名の二歳児の記録を資料として使いました。研究の焦点は、「保育所という場における二歳児の人間関係」とし、特に自分・大人・仲間をキーワードに、人へのかかわりを中心にその様相をとらえてみました。三十三名の二歳児の

記録ということは、三十三園にいる二歳児ということにもなります。実習を通じた観察期間は十日以内です。

さて、月例会での話し合いを通して、今回は子どもの発達の様子をデジタル的表現ではなく、なるべくアナログ的表現でとらえてみたいと思いました。

つまり、子どもの発達を個別の行動や「できる」「できない」でとらえるのではなく、日常生活の流れの中で、子どもの行動を連続して揺れ動く事象としてとらえてみるということ。資料そのものが「物語る」表現形式だったので比較的容易に読み取ることができました。

自分・大人・仲間という関係の中で、人とのかわりを描写している場面を短い文で書き出してみました。すると一人の子どもの描写の中に、「いつも一人で遊ぶ」「友達と減多に遊ばない」という描写と「保育者に抱きつき、話しかけ甘える」「一人

じゃあつままないと先生に言う」という両局面の行動がいくつも出てきました。以下、人とかかわりに観る二歳児の特徴的な行動様相を紹介します。

- 「二人遊びが多く、他の子のおもちゃを無理やりとる」一方、「保育者と二人でコミュニケーションをとると安心し、よく笑う」
- 「保育者の説明を聞こうとしない」のに「注意されるとすぐ納得し、理解したように見える」「人とかかわらず感情をあまり表に出さない」が、「話は理解し、人の顔をじっと見て様子をかかっている」
- 「保育者に言葉をかけられるとゆっくりだがかちんとでき」、「小さい子におもちゃを貸してあげることができる」
- 「おもちゃは自分のもので、他の子が興味

- をもつと『イヤ、ダメ』と言う」が、「他の子のおもちゃをとり上げようとする」
- 「園では人見知り、一人遊びが目立つ」が、「保育者が手をつなぐと嫌なことも頑張れる」
- 「一人遊びが多いのに、他の子のまねをして遊ぶ」「友達に親切して、嫌がられ、保育者に『嫌だったんだって』と説明されても、理解できずにきよんとしている」
- 「自己中心的でわがまま」だが、「先生に注意されると、『ダッコ・ダッコ』と言って甘えてくる」



-
- 「おとなしそうだが隣のクラスの子にかみつく」こともあり、「下唇を上唇に入れて（泣かないぞ）と不安をかみしめる」
 - 「仲間の頬や腕をつねる」一方、「甘えん坊で常に愛情を欲しがる」「赤ちゃんをつねって注意され、うなずくがまたすぐ同じことをし、わかっているのかいないのかわからない」
 - 「手洗いで水遊びをし、『もう終わりだよ』と言われても続け、こちらが言っていることをあまり聞いてくれない」
 - 「したくないことには、『ウーウー』とか『イヤイヤ』と言う」が、「保育者が一緒にやろうかとかかわると、じっと保育者の目を見る」
 - 「けんかや、もののとり合いが多い」が「友達とよく遊ぶ」

-
- 「友達をよくたたき、先生に注意され、『いい子いい子してあげなさい』と言われる」と、友達の頭をなでる行動が気に入る
 - 「独占欲が強いが、大人に認められると譲れる」「やってはいけないことをよくまねるが、『やめようね』と言ってやめさせるとやらなくなる」一方、「いけないことをして注意されると離れて床にうつ伏せになり泣く」
 - 「わざとものを投げたり、逃げたり、自分の気持ちを素直に表現する」「認められるとおもちゃを友達に譲れる」「お迎えが遅い時、保育者に支えられ涙をぐつとこらえて我慢できる」
 - 「どうやって友達になつてよいかかわからず、いきなり友達を押ししたり、玩具をとったりする」

以上を含む記述を基に、「自己」「遊び」「コミュニケーション」の三つの観点から二歳児の行動発達の様相をとらえてみます。

「自己」

- ・ 母親からの分離への課題に直面する。
- ・ 基本的生活習慣の自立への課題に直面する。
- ・ 基本的生活習慣ができていても気持ちに向かないと自ら行動しようとしめない。
- ・ 自分中心の世界に在るが、外に関心を向け、戸惑い、混乱する結果、「寡黙」「無表情」「自己主張」「反抗」「かんしゃく」などの行動になる。
- ・ 言葉による説明に納得したように見えるが、理解は流動的である。
- ・ 空想と現実の世界の間に在り、理解されないことがある。

「遊び」

- ・ 一人遊びが多いけれど、一人じゃつまらないという気持ちもある。
- ・ 気に入ったおもちゃにまっしぐらだが、他の子のおもちゃにも関心がある。
- ・ 他の子のおもちゃをうばって注意されても、真の反省にはならない。
- ・ 他の子からおもちゃをうばわれても訴えないこともあるが、一方、他の子からおもちゃをうばわれないか警戒し、うばわれると大声で泣いたり、相手をかんだりする。
- ・ ブロック・絵本・乗り物・動物などお気に入りのものである。
- ・ お気に入りのおもちゃを両手（または片手）に抱えて遊ぶことがある。
- ・ 大人との安定した関係が成立すると充実した遊びを展開できる。

「コミュニケーション」

- ・ どうやって友達になつてよいかわからない。
- ・ 一人行動が多いが、身近な保育者や友達の良いこと、悪いことを含めてまねをする。
- ・ 感情をあらわに出さなくても、身近な人の様子をじつと見る。
- ・ 保育者に甘える二者関係は欲するが、第三者が入つてくると混乱する。
- ・ 保育者や友達から働きかけられると受身でそれに応える。
- ・ 自己主張は強いが、保育者にほめられたり認められると我慢できたり、協力できる。
- ・ 「ナーニ?」、「コレハ?」と言いながら近寄ってくることができる。
- ・ 一緒に遊んだり、親切にしようとするが相手がなぜ嫌なのか理解できない。

二歳児はゲゼルから「恐るべき二歳」(terrible

Two)と称されました。それまでいた自分中心の

安定した世界から心を外へ向け、戸惑い、混乱し、

どうしたらよいかかわからず、悪戦苦闘しているの

が二歳児なのだと思います。まさに「わたし」

(I)から「あなた」(You)・「わたしたち」(We)

(佐伯)の世界への入り口で混乱し、揺れ動き、人

間関係を結ぶために保育者の助けを切実に必要として

いるのでしょうか。この時点での大人のかかわりの

成否が、その後の人間関係における行動に影響して

くるような気がします。

さらに、周辺の年齢の子どもの比較も必要と感

じています。一歳から三歳までを見通し、繰り返し

現れる発達の様相と、それぞれの年齢特有の意味に

ついて考えていきたいと思えます。

(幼保プロジェクトメンバー・常磐短期大学)